

第1回「Zb文芸」ショートショートの一部入選作品

スギモトくん

いわもと かずひろ

日曜日、スギモトくんの家へ、はじめてあそびに行つた。スーパーの前を通り、びょういん、文ぼうぐ屋、小さな公園、そして、ケーキ屋の前を通り、ちよつと遠かつたけど、がんばつて歩いて行つた。

家につくと、妹のユキちゃんとおかあさんも、げんかんで出むかえてくれたので、ボクはちよつと、はずかしかつた。

すぐに、スギモトくんのへやへいった。

中に入つて、びっくりした。

水そうが二つもあつて、たくさんの金魚がおよいでいたんだ。

「買ってきた金魚がたまごを生んじやつてさ。図書かんを本をかりてきて、みんなでそだてたんだ」

スギモトくんは、なんだか、とくいそうだった。

金魚はともかわいかつた。ずっと見ているとぜんぜんあきない。ボクも、かつてみたくなつた。

そしたら、ユキちゃんが、ジュースとおかしを持ってきてくれた。

三人でランプをした。しんけいすいじやくと七ならべ。これがとつても楽しかつた。

夕方、帰る時間になつて、ユキちゃんが言ってくれた。

「また来てね」

だから、ボクはスギモトくんに聞いた。

「また来ていいかな？」

「もちろん、ぜひ来て！」

そこで、ボクは（また来よう！）と思いながら、帰るところにしたんだ。

スギモトくんの家を出て、帰り道を歩いていると、

ポツ、ポツ

ふつてきた。

（雨だ！）と、思っていたら……。

きゆうに、

ザーザーツ

と、ふりだした。

（わあ、こりやまずいぞ）

ボクは、早足で歩き出した。

雨はもつともつとふつてきて、ボクは、だいぶぬれてきてしまった。だから、思いきり、走つた。

でも、ますますぬれてきて、目の前に文ぼうぐ屋のひさがあつたから、その下にとびこんだ。

（たすかつた！）と思つた。

しばらくまてば、小ぶりになるだろうと思つたけれど、雨はぜんぜんやまないで、どんどんはげしくなつていくみたいだ。

ボクは、ひさしの下から動けなかつた。

車が水しぶきをあげて走つて行く。かさをさして歩いている人もたいへんそうだった。

いつまでまつても、雨はやみそうもない。

だから、ちよつとでも小ぶりになったら、とび出して家までかけて行こう、びしょびしょになつてもかまわない、と気もちをきめた。

けれど、雨は少しも小ぶりにならないで、はげしくふりつづいた。

もうしかたがない、体中びしょぬれになつてもいい、とにかく走つて帰ろうときめて、とび出そうとした時だ。

黒いかさをもつた人が、ひさしの下に入つてきた。

スギモトくんだった。

「おかあさんが、きつとどこかで雨やどりしてるだろうから、かさもつて、行つてあげなさいって言うから。はい、これ！」

スギモトくんが、さしていたかさをわたしてくれた。

「えー、いいの？ スギモトくんは？」

スギモトくんは、わきの下にはさむようにしてもつていた、もう一本のかさを広げてみせた。

小さな赤いかさだった。

「あわてて、ユキのかさ、もつてきちゃつた」

「えーっ、小さくない？ ボクがそつちでいいよ」

「いやあ。あしたも雨だと、ユキがこまるだろう」

「そうなの？」

「うん。じゃあね。また、あそびにおいでよ。こんど来た時、もしよかつたら、金魚、あげるよ」

「ほんと？ かならず行く」

「それじゃ」

「あつ、ありがとう！」

スギモトくんは、小さな赤いかさをさして、雨の中にとび出していった。

はげしくふる雨の中を、遠のいて行く赤いかさが、一匹の金魚のように見えた。

